

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

12月



「地域全体で子どもたちを支え、育む」

「ユースセンターまあぶるでの活動を通して」前編

令和六年六月三日にきらめきプラザで開催された、青少年健全育成講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、NPO法人manabode(まなぼーで) 理事長 森年 雅子(もりとし・まさこ) 先生です。

● 子ども・若者支援のきっかけ

こんにちは。今日は、我々が団体としてどういうことを大切にして、中高生、十代に関わっているか、また、そう思うようになった背景などを中心に話したいと思っています。

私は岡山市の出身で、元々は保健体育の高校の教員として、十三年間現場に立っており、縁があって、真庭の高校で勤務することになり、それまでは県南の学校で勤めていたんですが、県南と県北の子どもの様子や、環境、資源の違いをすごく感じました。現在は真庭に住んで九年目で、学校現場から離れて、真庭や県北の子どもたちを中心に十代をしっかりと支えていこうと、若者支援を提案しています。肩書としては、manabodeの理事長と書いてますが、真庭市教育委員会で「地域学校協働活動」に関わったり、県内の専門学校や通信制高校で非常

勤講師として勤めたりしながら、子どもたちファーストの活動をしています。

初めに、manabodeについて話します。これは、二〇二〇年の十一月に、学校の先生たちが有志で作った団体です。「先生も学び場が欲しいから、若い先生がゆるく集おう」と勉強会をしたんですが、「勉強したことを子どもたちに還元しないと意味がないんじゃないか」と法人化して、幅広く教育事業を展開していこうと発展していききました。現在は、ユースセンター事業、オンラインでの勉強会「modスタ」、子育て支援それから健康スポーツに特化した事業「うったて」を実施しています。

● 支援において大切なこと

私は、地域で子ども・若者育成支援をしていく中で、総合的な枠組から考えることが

重要だと考えています。つまり、社会の仕組みを理解して子どもの支援に関わらないと、サポートに迷いが出てしまうということですね。あとは、共通の基盤や、理念、方法論をもつて実践している団体と繋がってネットワークを作る重要性をすごく感じていました。

その背景には、子ども・若者と地域を巡る問題があります。子どもの生育環境である、家庭、学校、地域を考えてみると、まず、家庭では、教育格差や、共働き世帯の負担感かなり増えてきています。今はPTAなども嫌がる方がいるし、共働き世帯などでは子どもを学童に預ける方もいます。また、学校では、いろんな興味関心を持つ子どもに対して、学校教育だけでは担い切れない部分が見えているのに、様々な教育問題に、学校だけで対応しようとしているところが課題になっています。さらに、地域では、教育力の低下や、負担軽減により行事や組織がなくなりつつある中で、地域コミュニティが見えにくくなっています。特に、地域における問題では、真庭市に住む中で、様々な体験の機会が減少していると感じています。

それから、安心安全な居場所や、関わる人間が少なくなると、人間関係がなかなか築けなかったり、自由に試行錯誤できる機会や、

地域社会に参画する場面がすごく減っている。なぜかと考えると、やっぱり「めんどくささ」なんですよね。これをいかに楽しめるか、楽しめる人がどれくらいいるかが、地域の盛り上がりに関わってくると思います。

地域における子ども・若者育成支援では、全ての子どもに届けるのか、ある一定の子どもたち(例えば、不登校の子ども、など)に届けるのかを明確にすることが大事です。そして、日常を届けたいのか、非日常を届けたいのかということ。例えば、「子どもたちに、三食ご飯を食べる日常を届ける、子ども食堂をしたい」のか、逆に、「都会の子に、山や川に入る非日常的な体験を届けたい」のか。このように、何をターゲットにして、何を届けたいのか非常に重要だと思っています。

● オランダの教育を視察して

子どもの幸福度ランキングによると、総合順位で日本は二十位です。この結果を受けて、オランダの教育を見に行きました。

低学年のクラスでは、教室の中に子どもたちが二十人ほどと先生が二人いて、一人は一斉授業、一人は個別指導という形で教えていて、勉強したいことも、子どもたちがそれぞれ決めて勉強していました。さらに

倉敷第一中学校
3年 松本 昂大
(令和5年度)

「駿馬」(水墨画)

馬の躍動感をだすため、
たてがみや、尻尾の毛
を一本一本細かく描い
た。また、立体感をだ
すため、墨の濃さを使
い分け描いた。



認して、「幸せじゃないなら、どうしたら幸
せになれるか。僕たちが考えるよ、支える
よ」とお互いに言ってるんですね。

また、先生と子どもの関係を見ると、体育
の授業中に、男の子がクラスメートとぶつ
かって泣いちゃったんですね。すると、先生
は、その場でずっとその子を見て、自分で話
すまで、何も手を出さないんですよ。ずっと
待って、自分で話をさせるんですね。いろい
ろ話して、最後に先生が「じゃあどうした
いっ」って聞くと、その子は、「お茶を飲んで
授業に戻りたい」って言って、先生は「じゃあ
一緒に飲んで戻ろう」と、授業に戻っていき
ました。「どっちが悪い」と線引きするより
も、自己表現をきちんとさせることが非常
に重要なんだなと感じました。オランダの
先生も「どうして? 何があった? どうし
たい?」って常に聞くと聞いていました。

● 地域の居場所づくり

日本の話に戻しますが、令和三年度の内閣
府の子ども若者白書では「居心地のよい居
場所がないと感じている子どもや若者が増
えている。居場所の数は、自己肯定感や充実
感の高まりなどと相関関係がある」とことが
明らかになっています。

真庭市は、今年度から高校が一つ閉校にな
り、より学生の人数が減っています。また、中

山間地域に位置していて、過疎化が非常に早
く進んでいる地域でもあります。なので、
地域の居場所づくりも重要です。将来を
担う人材育成が喫緊の課題だと感じしていま
す。真庭市には勝山高校と真庭高校があり
ますが、地元への進学率は五十%に満たない
状況です。地元を出る理由を子どもたちに
聞くと「人と関われる場所に行きたい」と
よく言います。県北には、私立の大きな学校
があつて、そこに行けば友達がたくさんで
きるから、そこを選ぶ子どもたちがいると、
最近わかってきました。

高校生の社会参加に関する意識調査では、
「日本の若者は公的なことよりも私的なこ
とに関心が高い」という研究結果が出ていま
す。部活、生徒会活動、学校行事など関心が
高くても、過疎地域になると、やりたくて
もできないということが起っています。部
活も、人数が少ないからチームを組めない、
場所がない、人がいない、顧問の先生がい
ないとか。また、小さい世界なので、生徒会活動
とか、ちよつと目立つことをするのも嫌うん
ですね。「生徒会に入って偉そうにして」って
言う子もいて、やりにくくなつていて、若者
の中で興味関心が高い部分が、環境によつて
狭められているところもあります。

一方で、日本の若者は、寄付、募金、環境
自然保護、動物愛護などに、なかなか意識が

向かないので、これらの問題に小さいときか
ら触れる機会も必要と強く感じています。

二〇二〇年から二年間かけて、真庭市の高
校生を対象に研究した中で、教育課題とし
て、人間関係の希薄化、自分の学びたいこと
が多岐にわたっていて、活動適正や学びの内
容が精選されていること、そして、安心安全
な学びの場の確保が喫緊の課題になってい
ることが分かりました。そういった背景か
ら、我々としても、子どもたちの居場所学
びと遊びの両方を体感できるような場所
を作る必要があるんじゃないかということ
で、スタートさせました。

「安心安全」について、少し考えてみます。
最近の広告ですごいですよね。実際にあつ
た広告ですけど、「成績上げたい人だけ応
募してください」「中二生変わるのは今」
「新学期からのスタートダッシュで差をつけ
る」など、これ、子どもたちをあおつてま
すよね。こういう、日常的に視界に入るもの
が、かなり子どもたちを苦しめているんじゃない
かと思っています。子どもたち一人一人
成長の度合いも、スピードも、興味関心も違
う中で、「これをやってないと遅れちゃう
よ」という言い方はどうなんだろうってす
ごく思ってますね。辛さを感じる子どもた
ちが一定数いる事実もあります。

(後編続く)